

Title	異性愛主義社会において自己を語ることの困難 : J. バトラーにおける、フロイト・ラカンとメルロ=ポンティの諸議論の総合をもとに
Sub Title	
Author	長野, 慎一(Nagano, Shin'ichi)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2022
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.27 (2022. 7) ,p.126- 127
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	大会報告要旨 : 2021年
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20220702-0126">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20220702-0126</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

異性愛主義社会において自己を語ることの困難  
—— J. バトラーにおける、フロイト・ラカンとメルロ＝ポンティの諸議論の  
総合をもとに——

長野 慎一

### 1. 目的と方法

本報告は、J. バトラーの所論から「間身体的な実存」と「無意識」をめぐる理論を抽出し、これをもとに、異性愛主義社会における自己の語り難さを指摘することを目的とする。

### 2. 間身体的な実存としての身体

メルロ＝ポンティによれば、実存とは、あらんと欲するものへの移行の運動である。主体とは、まずもって、身体として実存する限りでの行為者である。言語とは、実存する主体としての身体が、感情的意味を表す行為としてある(Merleau-Ponty 1945=1982: 232-45, 626, 674)。

ただし、身体は、間身体的条件のもとで生成する点で、他律的である。他の身体から感じられる／触れられるという受動的関係においてしか、あらんと欲する自己を形成できないのである。だから、ありうるのは、「ぶれを伴う再帰性」、すなわち、自己ならざるものに巻き込まれつつける自己意識である (Merleau-Ponty 1964=1989: 185-96, 364-83)。

バトラーの議論には、かかる再帰性と無意識の関係を論じる理論の萌芽を見出しうる。

### 3. 身体の再帰性と無意識

メルロ＝ポンティは、身体が再帰性をもつ条件に身体が理念によって接触されることを挙げる。同時に身体の自己意識が理念を完全には感知しえない点も強調する (Merleau-Ponty: 1968=1981: 26-33, 56-9)。

バトラーは、理念に同化しえない身体の無知に着目し、禁じられた身体との禁じられた関係を自己意識に仄めかす無意識の作用を身体に見出そうとする (Butler 2019: 60)。これに関連して、バトラーの議論には、4つの他者、すなわち、理念(大他者)、理念を具現する小他者、脱理念(悍ましき大他者)、脱理念を具現する悍ましき小他者を見出しうる (Butler 2019: 36-62, 149-70)。

バトラーは、精神分析学の再読をもとに、幻想的同一化が、悍ましき大他者との禁じられた関係を仄めかす無意識との関係で帯びる様態を論じてきた。異性愛規範に固執する同一化は、禁ずべき同性愛的欲望を無意識の水準で温存しつつ、それを否認する運動において、自己意識

を維持する活動である。他方、無意識へと留め置くことを強いられる身体のあり方を探索し、脱一同一化に向かう活動もありうる (Butler 1993: 84-91, 1997: ch5)。

これらの活動を、間身体的な実存の問題と読み替えるならば、身体として自己を省みる主体が、悍ましき小他者との予期せぬ交わりの中で、自己の無意識が不意に知らせる悍ましき大他者との関係にいかに向き合いうるかという問題である。自己の語り難さも、この問題の一環としてある。

#### 4. 自己の語り難さの二つの次元

第一の次元は、間身体的秩序の異性愛主義的偏向を原因とする、自己を語る条件の不平等である。理念としての異性愛を肯定する呼びかけが優勢な間身体性においては、個別の同性愛者(悍ましき小他者)は、侮辱表現を浴びせかけられ、諸身体の輪からも追われる。この状況は、非異性愛者としての可能性を示唆する無意識と向き合う機会を、身体から奪うように作用する。

第二の次元は、異性愛主義の原理的矛盾への曝露である。無意識の作用ゆえに、自己に関する一貫した語りは原理的に不可能であるはずだ。だが、同一性を強いる社会制度は、揺ぎ無い同一性を語ることを強いる。異性愛主義はこの制度の一類型である。この矛盾ゆえに、自己を語ることは困難なのである。

#### 5. 結語

間身体性において身体には再帰性と同時に無意識が形成される。ゆえに、再帰的に自己を語り尽くすことは不可能である。異性愛主義社会に見出しうる一般的問題は、この点を無視することであり、特殊な問題は、語るからには異性愛者として語ることを強いることである。

#### 【文献】

- Butler, J., 1993, *Bodies That Matter: on the Discursive Limits of "Sex"*, New York & London: Routledge.  
 ———, 1997, *The Psychic Life of Power: Theories in Subjection*, Stanford: Stanford University Press.  
 ———, 2019, *Senses of the Subject*, New Delhi: Dev Publishers & Distributions. SS
- Merleau-Ponty, M., 1945, *Phénoménologie de la perception*, Paris: Gallimard. (1982, 中島盛夫訳『知覚の現象学』法政大学出版局.)  
 ———, 1964, *Le visible et l'invisible*, Paris: Gallimard. (1989, 滝浦静雄・木田元訳『見えるものと見えないもの』みすず書房.)  
 ———, 1968, *L'union de l'âme et du corps chez Malebranche, Briant et Bergson* Note prises au cours de Maurice Merleau-Ponty à *École Normale Supérieure (1947-1948)*, Paris: Jean Deprun. (1981, 滝浦静雄・中村文郎・砂原陽一訳『心身の合一』ちくま書房.)

(ながの しんいち 東京理科大学・教養教育研究院 非常勤講師)